

# 教学半也



令和6年11月25日  
No.11

## 授業から学ぶシリーズ ～特別活動～

特別活動に携わる先生方対象

学級活動の内容(1)学級や学校における生活づくりへの参画  
～合意形成の手立てとなる思考ツールの活用～

「学級活動における課題の解決方法が、いつも多数決になってしまっているがよいのだろうか」という先生方の声をよく耳にします。子供たちの意見をまとめながら合意形成を図っていくためには、どのような工夫が必要でしょうか。



多数決は決して悪いことではありませんが、個々の考えに耳を傾けることなく進めては何の意味もありません。合意形成を行っていくには、それぞれの考えを比べやすいように視覚化し、※右のような視点で比較することが大切です。

今回は、思考ツールの活用しながら合意形成を目指した諏訪市立中洲小学校4年3組担任の田中大智先生の様子を紹介します。

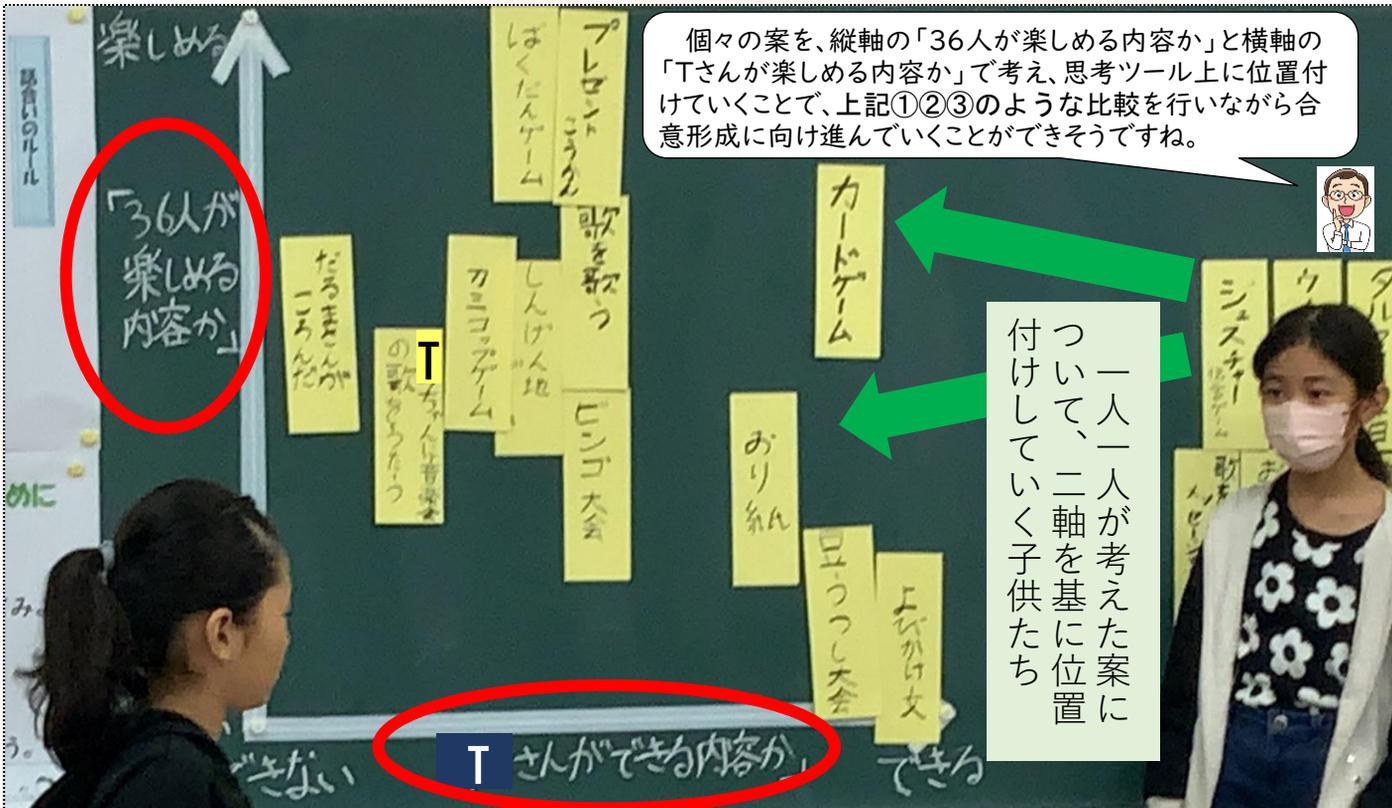


- ① 互いの意見を理解し合う  
(相手の立場に立って共感的に理解する)
- ② 何が違うのかを明確にする  
(理由を明確にして比較する)
- ③ 見方を変える  
(視点を変えて比較する)

※「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動小学校編」  
(文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター)

### 【議題】 「Tさんのお帰り会で何をするか決めよう。」

個々の案を、縦軸の「36人が楽しめる内容か」と横軸の「Tさんが楽しめる内容か」で考え、思考ツール上に位置付けていくことで、上記①②③のような比較を行いながら合意形成に向け進んでいくことができそうですね。



一人一人が考えた案について、二軸を基に位置付けていく子供たち

病気のため9ヶ月の間、学級を離れていたTさんが戻ってくるということで、4年3組の子供たちは、議題の解決に向けて話し合いました。「Tさんができる内容か」という基準は、Tさんから届いた現在の自分の現状を記した手紙が基になっています。4年3組の一人一人とTさんが、互いに信頼し合うからこそその温かく、そして真剣な時間でした。思考ツールが機能することで、成り行きや惰性の多数決による解決ではなく、4年3組全員が納得する合意形成に向かっていました。子供たちの思いを裏切らないの工夫を学ばせていただきました。



対話的な学びを意識した単元や授業の工夫

授業で話し合いの時間をとったものの、思うように学びが深まらなかった経験はありませんか。生徒が友との話し合いを通じて、自分の考えを広げたり深めたりできる授業を目指した、喬木村立喬木中学校 安藤俊輝先生の単元や授業の工夫を紹介します。

【生徒の問いを真ん中に据えた単元展開】

<b>ヨーロッパ州</b>	
1時 ヨーロッパ州はどんな地域なのだろう？ 2時 EUはどんな組織なのだろう？	
<b>単元の学習問題</b> ヨーロッパ州では、EUに加盟する国と加盟しない国があるのはなぜだろう？	
←	3時 EUに加盟するとどんなよいことがあるのだろうか？
←	4時 メリットがたくさんあるのに、どうしてEUに加盟しない国や離脱する国があるのだろうか？
←	5時 EUの加盟国は今後も27/45のままだろうか？ ・「増える」「減る」「現状維持」を選択し、自分の考えを書く。 ・ジャムボードに全員の考えを構造化し、論点を明確にする。
←	6時 ・友の意見の根拠を聞いたり、情報交換したりして話し合い、EUの加盟国数がどう変化するかもう一度考える。
EUという国家間の結びつきに関わるよさや課題を多面的・多角的に考えて、地域統合のこれらについて根拠を明確にして説明することができる。	



1 【第6時】  
なぜ友は、そう考えたのだろう？友の考えを聞きたいという必要感をもち自分から友との話し合いを求めるAさん

2

「45」の数については諸説あるがこの授業では45にした

**1** 生徒が話し合う必要感をもてるようにする

**2** 生徒と話し合う目的と方法を共有する

生徒は「EUの加盟国は今後も27/45のままだろうか」という問いに対して、既習の知識や新たに調べたことを根拠にして自分の意見をもちました。

安藤先生は、話し合いの目的と方法を明確にし授業を構想するとともに、授業の最初に話し合いの目的や方法を生徒と共有しました。生徒は、話を聞きたい友の所に意見を聞きに行き、考えを再構築することができました。

安藤先生は、それぞれの意見と根拠をジャムボードにキーワードで入力し、クラスで共有する活動を位置付けました。生徒は自分と友の意見や根拠を比較し、「自分とは意見が違う、なぜ違うのか聞いてみたい」「同じ意見でも根拠が違う、なぜそれを根拠にしたのだろう」と、友との考えの相違点を認識することで友と話し合いたいという必要感をもちることができました。

**【話し合う目的】**  
EUの加盟国数がどう変化するか、根拠をより明確にして説明する。

**【方法】**

(1)何について話し合うのか  
・ EUの加盟国数が今後どう変化するかについて話し合う。

(2)どのように話し合うのか  
・ クラス全員の考えが入力されたジャムボードやスプレッドシートを見て、同じ意見でも根拠が違う友や異なる意見をもった友に質問をする。

(3)どのようにまとめるのか  
・ 友の話聞いてもう一度自分の考えを書く。

EUに支払う拠出金が大きな負担となり、今後、加盟国が減少すると考えたAさん。友との対話を通して、加盟国が増えることで独自の政策が行えなくなることを根拠として付け加えたり(考えの広がり)、さまざまなメリットがあるが、拠出金は国民の税金なので、メリットを上回るデメリットがあるのではないかと(考えの深まり)と、自分の考えを広げたり、深めたりする姿が見られました。「話し合う必要感」「話し合う目的、方法の共有」という2つの視点を大切に安藤先生の対話的な学びの実践に学びたいです。



道徳科に携わる先生方対象

## 「自己を見つめる」学習活動が充実する授業を目指して

道徳科では、子供たちが主体的に道徳性を養っていくために「自己を見つめる」「多面的・多角的に考える」学習活動を充実させることが求められています。伊那市立西箕輪中学校の古越裕也先生は、毎週の道徳科の授業を実践していく中で、次のような課題意識をもっていました。



古越先生

道徳科で扱う22の内容項目で、C(主として集団や社会との関わりに関すること)や、D(主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること)の内容項目の中には、生徒自身の生活場面や体験を想起させるのが難しい項目もあり、自分との関わりで考える学習活動の充実に課題を感じています。

そこで、古越先生は、**発問**や**問い返し**を工夫することで、自分との関わりの中で人間としての生き方についての考えを深めていけるのではないかと考え、以下のように授業を構想しました。



主題名 日本の文化を知り、継承することについて  
 内容項目 C(17)我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度  
 教材名 障子あかり(出典 光村図書 中学校3学年)  
 ねらい 我が国固有の優れた伝統と文化に対する関心や理解を深め、それを尊重し、継承・発展させようとする態度を育てる。

[教材の概要]照明デザイナーの石井幹子さんは、長年の友人であるフランス人で工業デザイナーのルポア氏とのやりとりの中で、障子のあかりのすばらしさを改めて教えてもらったような気持ちになり、日本の光の文化を継承しながら、これからも美しい光を創造し発信していきたいと願っている。

### 授業の一場面

中心発問:日本の光文化を継承し、発信していきたいと願う筆者の思いの源とは何だろう。



#### 【A生の学習カードの記述】

・もっと広めて知ってほしい。 ・外国人にほめられる文化を継承しないのはもったいない。

#### 【グループでの話し合い活動の場面】

身近な外国人であるALTを例に挙げ、日本の文化を外国人にほめられたときの筆者の気持ちについて、自分と重ねて考えられるような**問い返し**の工夫

#### 【身近な日本の文化について考える場面】

普段、日本の文化を意識していないことを自覚することで、継承することの意味について、自分との関わりで考えられるような**発問**の工夫

T:ほめてもらうことって、外国人からと日本人からでは何か違うの?

B生:日本人は良さに気付いていないのかも。

T:例えば、「金閣寺ってすごい。」って言っているのがALTだったら違うの?

B生:意味は同じだけど、感じ方が違うんじゃないかな。

C生:ALTから言われると、何か嬉しい。

T:なんでそんなに嬉しいの?どこから来る嬉しさ?

B生:自分の国の文化だからかな。

A生:(何度も頷く)



T:Aさんは、習字をやっていたよね。日本の文化だと意識してやっていたの?

A生:う〜ん。最初の頃、行書を書いていたときには、ちょっとあるなあと思っていただけで、だんだんなくなっていたかな。

T:空手習っている人もいたよね。日本の文化、継承しているって感じる?

D生:わからないな。

T:もし外国の人からほめられたらどう?

D生:嬉しいかも。



「考え、議論する道徳」の視点からの授業改善を進める上でも、「自分との関わりで捉えて考える」学習活動は欠かせません(道徳アシスト6より)。古越先生は、ねらいとする道徳的価値を明確にすると共に、目の前の生徒たちの実態と照らし合わせることで、自分との関わりで考える生徒の姿につながる手立てを講じました。自身の課題意識から、道徳科で求められている学習活動を充実させるための発問や問い返しを工夫している古越先生の実践に学びたいと思います。



道徳アシスト6  
(長野県教育委員会)



今回の研修の目的は、特別な支援が必要な子どもの理解や指導について学び、これまで取り組んできた学級経営や教科指導等について、**特別支援教育の視点から振り返ったり、意見交換したりすることを通して、自己課題を解決するための手がかりをつかむこと**でした。

特別支援学級だけでなく、通常の学級で学ぶ特別なニーズをもつ児童生徒への支援について、講義やグループ協議を中心に行われた研修の様子を三つの視点からお伝えします。

## 視点① 困っているのは子ども



初任者

私は学級の子どもが「友達とケンカばかりして困る」と感じていましたが、講義の中で、その子どもは「友達とうまく会話ができるようになりたい。」という願いをもっていることに気が付きました。**視点が変わるだけで、たくさんの支援を考えることができ参考になりました。**



その子の願いとか困っていることは何なのかな？

## 視点② 困難さやつまずきの背景を探る



きっとそれも要因のひとつだよね。

氷山の一角

困難さつまずき



背景や要因



初任者

こうして一人の生徒に対してじっくりと考える機会は大変だと感じました。特に、目に見える困り感の背景や関係していることは何だろうか話し合うことで、**新しい視点を得ることができ解決のヒントが見つかった**ような気がします。「授業に集中したいと願う生徒」に寄り添っていきたいと思います。

## 視点③ いろいろな人に相談する



初任者

私は校内の先生方が忙しそうだと気を遣ってしまい、あれもこれも一人でやらなければならないと思っていましたが、**チームで支援するという視点を再確認**できました。今日わずかな時間話し合うだけでたくさんのヒントを得られたので、学校に帰っても思い切って相談してみたいです。



忙しそうなお先生も、相談するとじっくり聞いてくれますよね。

今回の研修には、初任研コーディネーターの先生方が参観に来ていました。参観した先生方からは、「他校の先生方と悩みを共有したり解決の糸口を探す姿があり頼もしく感じた。」「自分の経験を生かして堂々と話す姿があり安心した。」などの感想をいただきました。初任の先生方が困っていることを共有し、子どもの思いに寄り添った特別支援教育の視点で実践を振り返ったことで、自己課題の更新や達成に、また一歩近づいたようです。